

# 「読」「書」行為の Figuration

—パフォーマティヴィティにおける Figur の生成／解体—<sup>1)</sup>

木村 裕一

[キーワード：①「読」「書」行為 ② Figur ③ Figuration

④ パフォーマティヴィティ ⑤ プロソポポイア]

## 1. 「誰が話しているのか？」

『皇帝の使者』というフランツ・カフカによって書かれたテキストがある<sup>2)</sup>。この奇妙な「伝説」から読み取ることができるのは、皇帝は死者であり、不在であり、使者はそのような死者、不在のものの知らせを届ける使者だということである<sup>3)</sup>。この時、皇帝が使者を送り出せるのは彼が死んだからである。皇帝はもはや遑及不可能な起源として、根拠なき根拠として、使者＝知らせ (Botschaft) の権威を保証する。しかもそのような保証は「太陽の紋章」によってのみ可能となる。使者自身が権威なのではない。その際彼の身元保証＝指示対象 (Referenz) は、すでにその起源から切り離され、起源への問いが発されるたびに、繰り返し参照されることになる。

このとき二つの表象が現れてくる。ひとつは「皇帝」、もうひとつは「きみ」である。ただし皇帝は使者が送り出されるときにはつねに死者であり、不在である。また、伝説上の主体としての「きみ」は誰でもないもの、誰でもいいものであり、「一臣下であるきみ、取るに足らないきみ、皇帝という太陽からもっとも遠いところへのがれているほんのち

いさな影であるきみ」<sup>4)</sup>であり、まさに今伝説を語り聞かされているもの、あるいはそれを読んでいるものである<sup>5)</sup>。この意味で、二つの表象は虚構的な不在である。というのも伝説において、「皇帝」が「きみ」に向けて使者＝知らせを送ったとは簡単には言えないからだ。むしろここでは、「皇帝」と「きみ」を目指す「使者＝知らせ」の存在、およびこの伝説を読み、書くことこそが、伝説という言説の内部に二つの表象を生み出す要因となっている。この時、使者＝知らせの到来の伝説は、ひとつの「夢」を作り出す。不在の表象は「夢」のなかに仮構されている。「夢」を見る主体としての「きみ」もまた、皇帝と同様に虚構であり、伝説の中でその形象を貸し与えられたひとつの表象、Figurなのである。

この「夢」は「読」「書」行為の中で生じている。「読」「書」という行為の中では、絶えず「誰が話しているのか?」、「誰が話されているのか?」という問いが生じる。だがこの問いの答えは、そのつどの反復的な問いかけの中で絶えず変化していく。この問いに答えることは、使者＝知らせの伝説の終焉、その到来を意味する。だが伝説によれば、「夢」は永遠に終わることなく、「読」「書」行為の中で絶えず繰り返されていくのである。

伝説におけるこのような繰り返しの過程を、本論ではある一つのレトリック、およびその構造的特質という点から考察していきたい。ここで行われている言語行為の背後には、いわゆる行為の主体が前もって存在しているのではない。それはプロソポポイア (*Prosopopoiia*) によって貸し与えられた修辭的な Figur であり、Figuration の中で生み出され、変化させられ、解消させられ、再び生み出されていくのである。では、主体はこのとき言語的な行為遂行の中で遡及的に後から生成された Figur に過ぎないのか。そしてこのような Figur の生成および解体過程である Figuration は、どのような運動性の中で生じているのか。この時いかなる言語行為遂行性 (パフォーマンスィヴィティ) が生じているのか。そこ

ではプロソポポイアというレトリックはいかに機能しているのか。

これらの問いは、我々の日常的実践や社会的行為がどのようにして成立しているかという問いと密接な関わりを持っている。というのも、言語によって、言語の中で生活している我々の文化や社会において、社会的秩序の構築は言語行為の中で繰り広げられているからである。そしてパフォーマティヴィティとは、そうした言語的なレベルにおいて生じているものである。この意味で、パフォーマティヴィティは言語システムとしてのレトリックと密接に関係している。とりわけ言語の中で、言語を持たぬものに言語を貸し与えるレトリックであるプロソポポイアは、単なる擬人法ではなく、「読」「書」行為の構造的特質であり、行為遂行の中で Figur をつねに生成／解体の過程の中に移しこむ Figuration の Figur である。プロソポポイアというレトリックこそが、「読むこと」とあると同時に「書くこと」である「読」「書」行為というパフォーマティヴィティにおいて、その統治的な「主体」の位置に Figur を作り出すための前提となっている。Figuration とは一方では言葉のレトリックの運動であると同時に、他方では Figur を言語によって構築する、社会的・政治的次元で生じるパフォーマティヴィティのプロセスなのである。

## 2. Figur

では Figur とは何か。この問いに答えることは難しい。この言葉は一般的にはおおよそ以下のような意味であるとされる。①形姿、体型、②登場人物、役、③人形、彫像、画像、人影、チェスの駒、④模様、図形、⑤音楽の音型、⑥文彩、象徴<sup>6)</sup>。一言で言えばこの言葉は「多義的」である。だが Figur という言葉の意味の変遷の歴史をたどると、このような意味の豊穡さを単なる多義性には還元しえなくなる。

Figur の語源はラテン語の figura である。「形成すること [fingere]、陶

工 [*fungulus*]、彫像家 [*fictor*]、および像 [*effigies*] と同じ語幹から派生しているフィグーラ [*figura* (形、姿、像等の意味)] は、その由来からして彫塑的な形成物を意味する<sup>7)</sup>。だが他方で、「彫塑的」ではっきりとした輪郭を持つものの意味のみならず、「見慣れない形 [*nova figura*] という用例が示すように、この語ははっきりとした輪郭をもっていない、「新しく現われるもの、変転するもの」という意味をも、語の歴史全体において持ち続ける。語の歴史において生じている意味生成の力の中には、「語の特殊な形成における、何か生き生きとして動きの激しいもの、不完全で遊戯的なものが表現されている」<sup>8)</sup>。*figura* はギリシア語の「スキーマ」を翻訳する際、借用翻訳語として用いられた<sup>9)</sup>。だが *figura* という語はスキーマという語が持つ意味以上に彫塑的なものを意味し、他方で、それに縛られないような運動的要素をもさらに持っており、その輪郭を自由に変化させていく。それは「ときにはスキーマより彫塑的であるばかりでなく、それより動的で輝きが強い」のである<sup>10)</sup>。そのような運動性の中で *figura* は、「形態からその模倣へ、原型から模倣への重要な移行」<sup>11)</sup> を生じさせ、多様な意味を獲得していくことになる。つまりこの語は、ある形象の「原型」を意味すると同時に、その「模倣」をも意味するように、絶えず変転し、自らの輪郭をずらしていくのである。

こうしたずらしの中で、原型／模倣という対立的な関係は解消されてしまう。ルクレティウスの形象論<sup>12)</sup>に見られるような「皮」という *Figur* のイメージが示すのは、「間」としての性格である。それは表層として事物の形象を構成し、原型／模倣という対立項の「間」に入り込んでいる。それは両者の「間」で媒介的な役割を果たし、結び合わせるのである。原型が自らの「皮」として帯びている *Figur* は、まさにその対立項である模倣のものでもある<sup>13)</sup>。語の変転の歴史の中で引き起こされている運動の中で、*Figur* は絶えずこのようにして類似性と差異の、同一化とその解消との「間」を揺れ動く。このような運動の中では、

Figur は一方から他方へと向かう絶え間ない運動の「間」の空白箇所できなく、確固とした輪郭を持ったり持たなかったりするような、決して把握しきれないものなのである。

また、キリスト教父たちは旧約聖書を figura として再読解するフィグーラ解釈 [Figuraldeutung] によって、現実的な事件を預言における約束の成就として解釈した<sup>14)</sup>。フィグーラ解釈は、「旧約聖書に登場する人物や出来事を、新約の救済物語の形姿、あるいは実際の預言として解釈する」<sup>15)</sup>。つまり旧約聖書の中の figura は、実際に起きた歴史的出来事の Figur として「受肉」される<sup>16)</sup>。ここでは figura という語の運動性は、2つの異なるレベルのテキストの「間」をつなぎ合わせる役目を果たしている。フィグーラ解釈において行なわれているのは、現実の出来事をテキスト化し、また逆に、テキストを現実の出来事に変換し、両者を架橋することである。その際過去／未来という対立は、Figur によって結び合わされることになる<sup>17)</sup>。つまり Figur は「約束」としての旧約聖書の中にすでに「成就」として書き込まれており、「肉化」されるのを待ち望んでいるのだが、それは隠されたものなのである。したがってフィグーラ解釈によって為されるのは、予型 (Prä-Figur) と Figur の「間」の移行である。

だが Figur が現在化されうるのは、それが絶えず過去／未来のあいだを揺れ動くことによるのみである。このような時間的作用によって、Figur はその現前や現在化を絶えず延期され続けることになる。このような Figur の運動性、Figuration の過程の中では、現前はつねに再現前でしかなく、したがってそれは存在論的な把握から絶えず逃れていく。現前によって不在も指し示され、不在が現前へと（再）移行するような運動性は、現在／不在、未来／過去、現実／虚構といった対立を攪乱してしまう。Figur は生じるやいなや、元の形態からそれに似たものへ、そして他なるものへずれていき、元の形態を解体しつつ変転していく。したがって原型と模像の「間」を行き来する Figuration の中では、Figur

の生成と同時に解体も行われている。つまり **Figur** を形成するはずの **Figuration** の運動は、**Figur** を解体してしまう **Defiguration** の運動をも奇妙な形で含みこんでいるのである。

このようにフィグーラ解釈においては、(De-)**Figuration** の運動によって旧約聖書の人物や出来事を、新約聖書の形姿や実際の預言として解釈することが可能となる。これはつまり、その運動性によって **Figur** という語が、人物や事件という形で具象的な形姿を帯びてそのつど立ち現われてくることを意味している。したがってこれはある人物の人物性、ある出来事の出来事性とも言うべきものを、**Figur** として輪郭付けることによって、それらを初めて把握可能なものにする「読」「書」行為なのである。

これは聖書解釈に限った話ではない。我々が日常的に生活している中でも、人間関係やそれぞれのアイデンティティの形成において、「読」「書」行為の **Figuration** は働いている。ある **Figur** としてある対象を **Figuration** の中で生じさせるということは、言語によって、言語の中で生活している私たちの社会にとって、きわめて構造的な特質である。では言葉の **Figuration** の中で、**Figur** としての個人はどのようにして社会の中に立ち現われうるのか。

言語と **Figur** の関係を人称代名詞の問題を例に見てみると、**Figur** の形成の中で言語が果たしている重要な役割、すなわち社会的な関係を構成する構造的な特質としての **Figuration** モデル<sup>18)</sup> が明らかとなる。諸個人、とりわけ「わたし」が社会の中に現れるのは、まず「わたし」という言葉によって示されるはずの何らかの本質や実体があり、それが名づけられるからではない。言語表現の手段によって形成される社会的なネットワークの中に組み込まれない人間などおらず、組み込まれない限りはそもそも「わたし」としてすら立ち現れえない<sup>19)</sup>。

したがって人称代名詞は同一的な個人においてすら静止的に固定されるのではなく、**Figuration** の連続的な変化の中でそれ自身もそのつど変

化する。つまり Figuration のある段階で纏っている Figur は、その前の段階に纏っていたはずの Figur を覆い隠すように上書きされ、あるいは完全に除去される形でそのつど新たに現れる。たとえば同一の代名詞はコミュニケーションにおいてそのつど異なる人間を指示しうるが、ここで問題になっているのは、コミュニケーションにおける語り手同士の、人間集団全体に対する地位の変化であり、コミュニケーションの中でそれは上書きされ、除去されながら絶えず変化する<sup>20)</sup>。社会的なコミュニケーションにおいて生じてくる Figur とは、まさに語りのなかで生じるものである。したがって語ることはコミュニケーションの中で自らの Figur をあらかじめ纏い、読み込み、書き込み、また同時に、語り始める瞬間には読み込まれ、書き込まれた Figur の纏いをすでに脱ぎ捨ててしまっているという、(De-)Figuration という運動性そのものなのである。

しかし Figur の生成／解体が言語と密接な関係を持っているなら、そのような生成／解体の運動性をそもそも可能にしている力は、はたしてどこから生じているのか。Figur はどのようにしてその輪郭を確定され、また逆に解消されているのか。そしてその過程で Figur から我々は、どのようにして意味を受け取り、あるいは変え、読解(不)可能なものとして生じさせているのか。これらの問題を考えるには、「読」「書」の行為遂行性とでも言うべきものに、焦点を当ててみる必要がある。

### 3. パフォーマティヴィティにおける不在

Figur は言語的な不在とつねに関わっている。不在／現在のあいだを揺れ動く Figur は、あの使者＝知らせをとりまく「皇帝」と「きみ」のように、行為の発生と同時に行為から切り離されてしまう。だが、それは行為の発生ごとにそのつど(再)召喚され、輪郭を解消されつつ再び確定し直されていく。それは絶えず書き直され、読み直される。では、

「読」「書」行為を取り巻いているこの「不在」を、我々はどう考えたらよいのだろうか。

そこには言語的なパフォーマティビティが働いている。行為遂行的発言 (performativ) とは、真／偽で測りうる状況確認的発言 (konstativ) とは異なり、それを言ったり書いたりすることによって同時に何らかの行為を行ないうる、すなわちパフォーマティビティを発生させるような言語のことである<sup>21)</sup>。ここで重要なのは、パフォーマティビティは失敗する危険につねにさらされているということである。だが提唱者 J. L. オースティンは、パフォーマティビティの発動がいわゆる「通常の」ものとは異なってしまふ例外的なコンテクストを、考察の対象から除外してしまう。たとえば劇中の発言や、文学作品などにおける虚構の発言や、独り言や引用だった場合などのことである。このような文脈内でのパフォーマティヴは、「まじめ」ではないがゆえに失敗する<sup>22)</sup>。彼においてパフォーマティビティの成功／失敗の基準は、ひとつにはそれが「まじめ」であるかどうかによっている。

だがここで問題なのは、パフォーマティビティが行為として「成立する」というとき、それは成功／失敗に関わらず、行為自体は「成立している」ということである。たとえば「読み」「書く」行為は、たといかなる結果をもたらしたとしても、行為自体の力をあらゆる形で発生させることができる。その際、Figur の不在に関わらず、それはいかなるコンテクスト内でも、行為として読まれ、書かれ、引用・反復されるものでなければならない。つまりここには二重の意味で「読」「書」のパフォーマティビティが働いているということである。

パフォーマティビティを書かれ、読まれるものの一種と考えると、このことは明らかである。書かれたもの一般 (エクリチュール) は反復される際に、他性を含みこむことで反復させられながら読まれる可能性、反復可能性によって構造化されている。あるひとつのエクリチュールは、コミュニケーションの媒介としてあるひとつの意味を伝達すべく読解さ



れるのではなく、それとは関係なしに読解可能でなければならない。あるひとつの意味がエクリチュールによって確実に、失敗することなく伝達されうるとするならば、絶対的で変化することのないあるひとつのコンテキストを固定し、その中にエクリチュールをつねに固定できなければならないということになる。だが、このようにしてある現前（発信者や受信者、書き手や読み手、語り手や聞き手など）を基準としてコンテキストを固定する可能性、およびその中にエクリチュールを固定する可能性は、記号としてエクリチュールが読解される可能性の可能性すらも否定してしまうことになる。

記号の構造的な特質にしたがえば、そのような固定は不可能であり、それが可能だとすれば、記号はそもそも通常わたしたちが考えるような「記号」とは別のもになってしまう。というのも、エクリチュールは不在を前提としているからである。たとえば、ある痕跡がエクリチュールとして読まれるためには、たとえ受け手が絶対的に不在だったとしても<sup>23)</sup>、あるいはそれを書いた当の本人がいなくても<sup>24)</sup>、必ず読解可能なものでなければならない。というよりむしろ、そもそもそのような現前に依存することなく読解可能なものでないとしたら、それは単なる記号以前の痕跡にすぎず、「記号」として目にすら入らないようなものだろう<sup>25)</sup>。だからエクリチュールが記号として読解可能であるためには、受け手および送り手の不在ということも必然的に言えなくてはならない。これは言い換えれば、記号は自らが生産された瞬間のあらゆる状況やコンテキストの中に固定されていなくても、つねに読解可能なものでなければならないということである。エクリチュールは反覆可能なものとして、読解を再生産し続けられるようなものでなければならない。つまり「まじめ」であれ「ふまじめ」であれ、意図が十全に読まれなかった場合であれ意図以上に読まれた場合であれ、記号の読解可能性にとってそれは問題とならない。

反覆可能性という記号の構造的な特質が意味するのは、記号は書かれた

瞬間、あるいは読まれた瞬間のコンテキストから己を断絶する力を持つということである<sup>26)</sup>。このことが同時に示しているのは、書かれた記号が権利上あらゆるコンテキストと結びつく可能性をもっているということである。ただしこれは、コンテキストが複数あるという意味ではない。なぜなら記号はつねにテキストおよびコンテキストから逃れることができなからである。この意味で反覆とは単純な意味で「別の」コンテキストへと移行するというではない。記号が反復される中で違ったように読まれる可能性、つまり「他」を含みこみながら読まれる可能性としての反覆可能性とは、コンテキストの固定の不可能性、その拡大や縮小の可能性ということと同義なのである。

「伝説」における *Botschaft* という言葉がもつ二義性、すなわち使者にして知らせであるというこの二義性は、使者の運動をエクリチュールの運動として読むことを可能にする。皇帝はまず使者に知らせを耳元で復唱させる。この時点では未だエクリチュールは主体、声、同一性、現前性の中にある。それは未だ反覆の過程の中にはない。同時に、この時点でわたしたちはまだ知らせの内容を知る由もない。だが皇帝が死に、エクリチュールが使者に託された瞬間、それは終わることのない反覆の営為の中へ、永遠の中間状態へと宙吊りにされてしまう。使者=知らせ=エクリチュールを取り囲む宮殿、町、そして長城は、コンテキストの接木可能性によって、潜在的には無限に拡張し続ける。このような反覆の過程の中では、もうすでに皇帝の意図は問題とならない。というよりもむしろ、それはもはやさかのぼることのできない根拠なき根拠でしかないのである。それは到達不可能なものとして、永遠に読解不可能なものとして残り続ける。しかしこれらの不可能性こそが、伝説を読み、書き、語ることを可能にしているのである。

このように、反覆可能性とはエクリチュールの脱中心的な運動性であり、必然的にそれ自身に対する接木可能性を伴っている。接木可能性は、テキストの終わりを設定するための境界線を、コンテキストの接木によ

ってつねにずらし続け、延期し続けることによって、テキストという名のもとに呼ぶことのできるような一連の記号の連鎖を、流動的な運動の中に絶えず移しこんでしまう。つまりエクリチュールが構造的に反覆可能かつ読解可能であるためには、唯一の決定的なコンテキストの中でのみならず、どんなコンテキストが接木されたとしても、いついかなるときでもそれを引用・反覆することが可能であり、読解可能でなければならないということである。このような接木可能性によって、記号はつねに読解不可能なものとしてしか立ち現われないことになる。なぜなら流動的なコンテキストの中で、記号は自らに対する同一性を失い続けていくからである。しかし同時に、そのような接木可能性自体が、記号の読解可能性そのものでもあるのだ<sup>27)</sup>。

記号がパフォーマティヴな効果をもつためには、たとえ独り言のようにその受け手がいないようなものであったとしても、そして期待された、あるいは意図されたパフォーマティヴィティが、(オースティン的な意味で)「失敗」してしまうようなコンテキスト内であっても、反覆可能でなければならない。むしろまさにそのような「失敗」の可能性によって、パフォーマティヴィティは産出されている。というのも、オースティンが「成功」の基準にしている「適切な」コンテキストもまた、反覆可能なコンテキストのうちの一様態にすぎないからである<sup>28)</sup>。つまり成功／失敗の基準によって、一方の側、たとえば「失敗」するコンテキストだけを排除することはできないのである。成功／失敗、適切／不適切、まじめ／ふまじめ、現実／虚構を問わず、あらゆるコンテキストと結びつけられ、接木される可能性は、言語活動一般の絶対的な条件であり、これを排除することはできない。

これは慣習的・儀式的コンテキストであっても同様である。オースティンは発話内行為の力を機能させている、発話がなされる全体的な状況を分析し、その全体的な状況を(「まじめ」な「意図」のもとに遂行された)慣習的かつ儀式的プロセスとして考えている<sup>29)</sup>。しかし彼は、そ

うした慣習もまた必ず「失敗」の危険にさらされていることを指摘するのだが<sup>30)</sup>、それらを問題の対象から除外する。もちろんここで問題なのも、そのような発話の全体的なコンテキストの設定不可能性である。反覆可能性と接木可能性によって機能するパフォーマティヴィティというテーゼが示しているのは、パフォーマティヴィティは反覆されるがゆえにその力の表出様態を特定できないということでもある。なぜならパフォーマティヴィティは、慣習性、正しさ、完全性、誠実性といった、隅々まで定義可能なコンテキストにおける「成功した」パフォーマティヴィティの単純な反復・コピーではなく、むしろそのようなある特定のコンテキストから己を切り離し、引用可能・反覆可能なものとして構造化されることによって、初めてその力を得るものだからである。

したがって、パフォーマティヴな効果を生産しているかのように見える起源と、パフォーマティヴィティの効果とのあいだには、架橋不能な断絶がある。たとえばすでに述べたように、そこにパフォーマティヴィティの起源としての主体や何らかの権力的・慣習的意図が入り込んでいたとしてもしなくても、それは問題にならない。パフォーマティヴィティは、そもそも発話がなされた瞬間のコンテキストから己を切り離してしまったとしても、己の力を生産できなかったとしたら、パフォーマティヴィティとして反覆可能なものですらありえないからである。

では、パフォーマティヴィティにおける不在の位置を占めていると思われてきた有責の主体、すなわち行為を直接に支配し、統治しているとこれまで思われてきた主体という地位に就かされていたものとはいったい何だったのか。それはいったい何によって行なわれていたのか。あるいは、それはどこから発生していたのか。その起源のようなものは本当にあるのか。「伝説」において、「皇帝」は「きみ」に直接話しかける Figur ではありえないとすれば、逆に「きみ」が直接話しかけられている Figur ではないとすれば、「誰が話しているのか?」、「誰が話されているのか?」

#### 4. 仮構される起源

パフォーマティヴィティは奇妙なことに、その力の発生源を特定し、名づけることができるようになる以前に、力の発生源を必要としてしまう。このような発生源は未だ誰でもないし何でもない。というのもパフォーマティヴィティは、その力の発生の営為の中で、その位置に主体という **Figur** を後から作り出すからである。

ここで問題なのは、パフォーマティヴィティが（オースティン的な意味で）「正常に」機能するとしてもそれは意図されたからではなくて、それを権威的に保証する歴史的慣習性が、意識的であれ無意識的であれ承認された結果だということである<sup>31)</sup>。だがパフォーマティヴィティが慣習によって完全に統御されるとすれば、それは結局歴史的権威に従属することによってのみ、その力を引き出しているにすぎないということになる。しかもこの時権力は単純に直接行為を機能させるのではなく、主体があたかも自らの意図によって行為を機能させたかのような錯覚を与える。だとすれば、その際主体は引用による従属的な力の再生産によって、自らの内部に権威や権力をイデオロギー的に保存してしまうということになる。

たとえばルイ・アルチュセールが提示する「警官に呼びかけられて振り向く」という呼びかけのモデルにおいて、主体はつねに良心的に権力に従属するもの (*sub-jekt*) として、疑うことなく無力に権力を再生産・保存するしかないものであるかのように位置づけられている。警官の呼びかけに対する振り向きは政治的・社会的・歴史的コンテクストへの従属を前提としている。警官は呼びかけを引用し、その声によって振り向かせることで、呼びかけられる主体が従属の位置にあることを（再）確認する。その反復的な繰り返しによって、振り向くことは慣習的事実としての自明性を蓄積していくのである<sup>32)</sup>。ただしここでは、「警官の呼びかけには皆振り向く」というある種の道徳的な誠実性が、イデオロギ

一的な權威の仮構の前提となっている。

では振り向かないことはいかにして起きうるのか。反覆可能性という概念にしたがえば、パフォーマンスティヴィティは慣習的な力が発生する瞬間のコンテクストから己を切り離す可能性であるがゆえに、主体は必ずしも従属するものである必要はない。というのも、パフォーマンスティヴィティは反覆的に再生産されていく中で、再意味づけの可能性をつねに含んでいるからである。あらゆる統治的な権力や全一的な主体は、そのような再配備や再配置のなかでそのつど後から作り出される。その意味で権力や主体はパフォーマンスティヴィティを超越的に取り仕切っているのもなければ、それに先立って存在するものでもないのである<sup>33)</sup>。

超越的な主体や権力が言説の外に存在し、パフォーマンスティヴィティを支配しているのではない。それは反覆のプロセスの中で演出され、いわば準-幻想として仮構されていくのである<sup>34)</sup>。ただしパフォーマンスティヴィティが仮構されるからといって、それは即幻想的・虚構的なものであるというわけではない。むしろパフォーマンスティヴィティの準-幻想的な仮構が、社会の中で現実構成力をもってしまうということこそ、パフォーマンスティヴィティにおける權威的起源の問題を複雑にしている。ここで問題なのは真実や現実ではなく、ある事柄を引用し、その真実性や現実性を反覆の過程の中で蓄積していくことにある。つまりここで行なわれているパフォーマンスティヴィティは、反覆と引用の実践の中で、ある出来事に出来事としての真実性や現実性を保証する形式を与え、そのコンテクストや出来事を取り巻く場面をそのつど定め、ある種の演出 [In-Szene-setzen = Inszenierung] によってそれが話されるための場面 (Rede-Szene) をそのつど召喚する Figuration なのである<sup>35)</sup>。

しかしだとすれば、準-幻想としてのパフォーマンスティヴィティが現実構成力をもつとき、主体や権威はいかにして目の前に立ち現れてくるようになるのだろうか。結局このような問いは、パフォーマンスティヴィティの結果としての起源の表象＝代理＝再現前 (Repräsentation) はどのよう

に作り出されるのか、という問いと関係している。というのもパフォーマンスティヴィティがその現実構成力を発揮するのと、そのパフォーマンスティヴィティによってアイデンティティの表象としての Figur が仮構されるのは、ひとつの同時的な Figuration のプロセスだからである。

興味深いことにジュディス・バトラーはあの「伝説」を、「[...]」掟の起源が最終的には到達不可能であり、掟による銘記がますます読解不可能になっていく [...]」<sup>36)</sup> ことを示す例として、掟の「権威」がいったいどこから、どのように引き出されているのか、と問う文脈の中で参照している。掟の起源として引用の実践の中でそのつど引き合いに出される権威は、遡及不可能な「根拠のない根拠」<sup>37)</sup> である。しかしそれこそがまさに、権力がその力を発生させるために必要不可欠な契機であり、かつその理解可能性を保証しているのである<sup>38)</sup>。したがって権威の根拠や起源への問いは、潜在的には無限に延期されうる。だがここで注目すべきは、根拠なき根拠としての権威が、「話者の虚構」を通じて具現化されるということである。それは「掟における神的な発話の権化」<sup>39)</sup> であり、掟の権威そのものではない。掟の権威はつねに何かを代理として要求し、そのものが直接現前することはない。だがそこから掟は権威を引き出すことができる。掟の起源とはつねに不在であり、虚構的・幻想的なのだが、まさにそのような準-幻想性から、掟のパフォーマンスティヴィティはその現実性を得る可能性をもつのである。

このようにパフォーマンスティヴィティはその力の発動を通して、不在の、虚構の主体としての表象の Figur を与える。ここで重要なのは、パフォーマンスティヴィティは、それ自体がひそかに持つ換喩の力によって、結果であるはずの主体を原因の位置に据えてしまうことである<sup>40)</sup>。こうして長い反復の歴史を越えて呼び出され、後から作り出されたはずの主体は、全一性をもつ統治的な行為の起源としての Figur を身にまとうのである<sup>41)</sup>。つまり、パフォーマンスティヴィティが作り出す仮の起源としての主体は、換喩による修辭的作用の効果にすぎない。修辭的な力は原因／結

果を逆転し、さらにその修辞性を忘却させてしまうことで、真実性・現実性をもつ原因を準-幻想的に作り出すのである。結果として作り出されたはずのパフォーマティヴィティの行為体は、応答＝責任能力 (Responsibilität) を負わされた統治的権力を貸し与えられることによって、その力の発動の原因としての主体へと転倒されてしまう。そして修辞性の忘却によって、パフォーマティヴィティはみずからの現実性を得る可能性、および現実構成力をもつのである。

「伝説」におけるパフォーマティヴィティにおいても同じことが言える。上に述べたような過程の中で、伝説は現実性を獲得し、「皇帝」と「きみ」というアイデンティティを仮構する。伝説を通して行なわれているのは一種の呼びかけなのであるが、しかしそれはその声が決して届かないような呼びかけである。伝説という媒介を通して行なわれる呼びかけは、ある権威によって保証されたアイデンティティとして「きみ」を位置づけるのだが、その権威の起源は「皇帝」そのものではなく、死んでいる皇帝であり、不在の皇帝であり、空虚な起源としての皇帝である。つまりそれは「根拠なき根拠」なのである。しかも、伝説における「きみ」はいまだ誰もいないもの・誰でもいいものであるから、その意味で伝説における呼びかけは、その起源も目的も空虚で未決定な不在である。その意味で「呼びかけはつねにその的を外す名指し」であり、「すでに存在しているものを報告するのではなく、ある現実を導きいれようとする」パフォーマティヴな行為なのである<sup>42)</sup>。したがって、パフォーマティヴィティが権力と結びつく瞬間とは、その力を引き出そうとする行為体に、修辞的な効果を通じて、有責の主体という *Figur* が与えられる瞬間なのである。言い換えればパフォーマティヴィティは、根拠なき根拠としての不在かつ虚構的な権威の換喩として立ち現れてくる *Figur* を通して、その現実構成力を発揮するのである。

このように、準-幻想としての権力の権威を、換喩的に起源としての主体の位置に着かせるためには、まずあるレトリックの中で、



Figuration の作用によって Figur を、換喩の前提として作り出さなければならぬ。しかしそれは、つねに同時的な Figur の解体を要求してくる。その際 Figur は生／死、現前／不在、現実／幻想のあいだを揺れ動き、対立を攪乱し、架橋する。とりわけこのような Figur は、死んだもの、不在のもの、本来は言葉をしゃべることのできないものなどに、言葉で語ることを可能にするための声や顔を貸し与えるレトリックであるプロソポポイアによって作り出される。

## 5. プロソポポイア

ハインリヒ・ラウスベルクによれば、プロソポポイアとは「非人称的な事物を、話すことのできる人格として、ならびにそのほかの人間的な振舞いをするのが可能な人格として導入すること」<sup>43)</sup>である。しかしそれは単なる擬人法ではない。それはとりわけ死者や不在のものに、「声」や、「マスク (prosopon)」としての「顔 (Figur)」を「貸し与える」レトリックとして位置づけられている。それによって、本来言葉によって捉えることのできないものは、言語体系の中に位置づけられ、かつ言語体系の中で語ることのできるものになる。そうして何らかの意図を語る主体が位置づけられ、はじめて Figur は読解可能なものとして立ち現れることになる<sup>44)</sup>。

しかしそれと同時に、プロソポポイアは、死者や不在のもの、声や顔を仮構するというその性質上、つねにその修辞性を暴露してしまう危険にさらされている。つまり、それはあくまでも声や顔の偽装でしかないがゆえに、プロソポポイアによって作りだされるはずの Figur が、実際にはそこにはない、本来は欠けているかあるいは決して存在しないような、濫喩的な Figur でしかないのだ、ということも同時に言うのである<sup>45)</sup>。したがって、このようにして作り出される Figur は、つねにその解体の契機にさらされているのだが、それによってはじめて

Figur として立ち現れることが可能になるのである。顔や声は「与えられなければならない」限りにおいて、偽りであり、恣意的である。だがプロソポポイアの修辭的操作の中でこれらの事実は隠蔽される。だがその操作は不完全な、露呈せざるをえないような隠蔽なのだ。その意味で、プロソポポイアは絶えず隠蔽／露呈のあいだを揺れ動く Figur でしかありえないのである<sup>46)</sup>。

言い換えれば、ここではまさに「顔を与えること」、話すための顔やマスクを貸し与え、濫喩的に隠蔽することは、同時にそれらの「顔を取り去ること」(defacement, disfiguration)、濫喩の露呈でもある<sup>47)</sup>。濫喩とは、字義的にそれ自身を意味するような名を未だ持たないものを、何らかの言葉によって恣意的に言い表し、呼び、名づけ、言語システムの中に導入するレトリックである<sup>48)</sup>。したがってそれは、名づけや呼びかけといったパフォーマンスな行為と関係を持っている。パフォーマンスな力を発動させるためには、そのための空虚な仮の起源から力を借りてこななければならない。名づけという行為は一見すると一方的な行為に見える。だが実際には、名づけのパフォーマンス性を発動させるためには、すでに名づけるものが名づけられている必要がある。というのも、名づけるものは、すでに名づけられ、言語システムの中に導入されていることを前提に、はじめて空虚な権威、あるいは根拠なき根拠をその身に引き受け、その力を引用することが可能になるからである<sup>49)</sup>。したがって、パフォーマンス性の発動においては、つねにプロソポポイアによる Figur の生成／解体、顔やマスクの貸与／除去がすでに先行しており、それによる名づけの連鎖がパフォーマンス性の発動条件となっているのである<sup>50)</sup>。

だがすでに述べたように、パフォーマンス性の発動と同時に、プロソポポイアはみずからが虚構的な Figur としての声や顔、しかも不在であり死者であるものの Figur が偽りにすぎないということや、みずからが濫喩にすぎないということを暴露してしまう。というのもパフォ

フォーマティヴィティを発動するには、その前提として、不在のもの、死者、あるいは口のきけないものに向けて呼びかけ、それらと呼び出すことができなければならないのだが、当然その返事が返ってくることは決してないからである<sup>51)</sup>。そのために、パフォーマンスティヴィティの発動の起源に立っているものが、空虚で不在の根拠なき根拠であることを、パフォーマンスティヴィティの発動そのものが明るみに出してしまうのである。したがって、パフォーマンスティヴィティの発動におけるプロソポポイアは、このような失敗の可能性によって構造化されている。それゆえ、プロソポポイアによって作り出される Figur は、みずからの生成のためにみずからの解体をすでに前提としていなければならない。この意味で生成／解体のあいだの奇妙な緊張関係は、まさにプロソポポイアがもつ運動性、つまり (De-)Figuration によって引き起こされているのである。

プロソポポイアは言語の恣意的な仮構の力の中で繰り返し生じる Figur である。「読」「書」行為は一方でテキストの読解可能性を前提とするので、それらを保証する何らかの意味や意図、起源といったあらゆる権威を引き受けさせるための Figur が作り出される。だが他方で、このような仮構の必要性が生じるのは、Figur が不在であるということ、そしてそのような不在に対する問いがつねに先行しているからである。そしてこのような問いかけの契機となっているのは、仮構された Figur の忘却である。つまり、「読」「書」行為はみずからの前提となっている権威を絶えず忘却し、問い、再度仮構し、それを繰り返していく。この意味で、言語の恣意的な仮構の力が「読」「書」行為から完全に払拭されることはない<sup>52)</sup>。しかし、言語の意味を虚構的仮構の力から完全に切り離して真実へと到達することの不可能性は、「読」「書」行為における Figuration の可能性を保証しているのである。

このようにして、プロソポポイアは読解可能性の前提となり、それはつねに「誰が話しているのか？」という問いを引き連れてくる<sup>53)</sup>。この問いはパフォーマンスティヴィティの起源に関わる問いである。すでに述べ

たように、パフォーマンスヴィティはその行為を引き受けるある有責の主体、しかも空虚で不在で虚構的な主体を要求してくる。その主体は発された声の読解可能性を保証する「顔」であり、「マスク」であり、Figurである。このようにしてプロソポポイアは読解可能性のFigurを作り出し、読解を支えているのだが、同時にそれは読解不可能性のFigurでもある。というのも、これまで見てきたように、プロソポポイアによって生成されるFigurとは、つねに解体の途上にあるFigurであり、その意味でそれは未完成であり、プロソポポイアのFigurによる読解の保証は必ず失敗してしまうからである。読解可能性のFigurであるはずのプロソポポイアは、構造上つねに読解不可能である。その意味で、プロソポポイアは読解(不)可能性のFigurでもあるのである。

「誰が話しているのか？」あるいは「誰が書いているのか？」このようなプロソポポイア的な問いかけは、「読」「書」行為の前提であり、かつパフォーマンスヴィティの根拠なき根拠を保証するものであるのだが、それは忘れ去られてしまう傾向にある<sup>54)</sup>。ミシェル・フーコーによれば、作者とは実在の対象としての作者を指すものではなく、エクリチュールを支配する「内在的原則」として働く機能的な記号であるという<sup>55)</sup>。つまり、ある実在の作者が書いたがゆえに、その書かれたものに対して作者の名前が冠されるのではなく、むしろ「読」「書」行為の中で生じるある種の倫理的原則の下に、エクリチュールを配置し、その言わんとすることを支配するために仮構される(準-)幻想的な有責の主体として、作者は後から据えられるのである。そこにはたえず空虚な起源としての役割を果たす、機能的な作者しか現れえない。その際、書く主体はすでに死んだものとしてしか立ち現れえない。というのも、書く主体はみずからの書いたものを反覆させるために、みずからを不在の、空虚な、誰でもないものにしなければならないからである。この意味で、エクリチュールは死者のものでしかない<sup>56)</sup>。「読」「書」行為の中でプロソポポイア的に仮構される作者は、テキストを分類する機能を果たし、

それによって「複数のテキストがある同一の名前の下に」置かれ、「それらのあいだに人びとが、同質性や系統性の関係、あるいはそれらのテキストの一部による他方の真正性の証明、相互解釈、並存的使用といった関係」を打ち立てる<sup>57)</sup>。つまりこうして与えられるプロソポポイアの主体とは、書かれたものや言われたものの起源を保証し、その現実性および現実構成力、あるいはその読解可能性を与える根拠なき根拠なのである。「読」「書」行為の中ではその真実性や現実性を保証する起源がつねに求められる。

ロラン・バルトによれば、「制度としての作者は死んだ」。だが他方でテキストの快樂は「作者」を欲する。「私は彼の形象 [フィギュール] (彼の表象 [ルプレゼンタシオン] でも、投影でもない) を必要とするのだ。彼が私の形象を必要とするように」<sup>58)</sup>。彼の表現が優れているのは、必要とされる虚構的起源が *Figur* であることを的確に言い表しているからというだけではない。「読」「書」行為は、読まれ、書かれているものにつねにつきまとっている作者という *Figur* のみならず、それを読み、書いているものの *Figur* としての「わたし」をも要求してくる、ということをも彼は明らかにしているのである。

「誰が話しているのか？」この問いはつねに「誰が話しているのか？」と話しているのは誰か？……」という無限に増殖しうる入れ子構造状の問いを伴う。こうして「読」「書」行為はそのパフォーマンスィヴィティの起源を背負いうる *Figur* を、潜在的には無限に要求し続けてくる。だがこのような無限の問いかけの中で、答えとしての *Figur* は、潜在的には無限に延期され続けてしまうのである。このような延期の中で *Figuration* は生じ、*Figur* は生成／解体の不断のプロセスへと移しこまれることになる。この意味で、「読」「書」行為とは *Figuration* の中で、*Figur* の生成／解体のあいだを絶えず揺れ動き続ける行為なのである。

こうしたパフォーマンスィヴィティにおける *Figuration* の運動性は、反覆可能性および接木可能性を前提的な発動条件として必要とするがゆえ

に、パフォーマンスを保証する権威や権力、制度や法や掟を覆してしまう可能性を持っている。バルトが述べたような作者の Figur は、もはや制度的・法的な主体として書かれたものを絶対的に保証する統治的主体ではない。それは「読」「書」行為によって言説の中に移しこまれることによって作り出される Figur であるがゆえに、作者／読者のあいだの差異を攪乱してしまう。つまり、「読」「書」行為の中で仮構される作者の Figur は、つねに読者の Figur と二重写しになって現れてくるのである。バルトが述べているのはテキストが持つ反覆可能性のことであり、反覆の過程の中で接木的に、テキストはそのつど Figur を選び、決定し、再び解消してしまうのである。

「誰が話しているのか？」このプロソポポイア的な問いは、言語の中で、言語によって生活する我々の世界の中で、「読」「書」行為を通じて社会的・政治的権威を決定し、それを背負いうる統治的主体の Figur を貸与する。だが明らかとなったのは、この問いは一回限りのものではなくて、反覆的なものであるということである。プロソポポイアはこの意味で、権威や主体といった社会的・政治的な次元での Figur の実現を可能にし、かつ不可能にする。プロソポポイアの構造としての (De-) Figuration とは、既存の、無批判に従属してしまっている慣習や法をずらしてしまう可能性を秘めた、Figur の生成／解体プロセスなのである。

## 注

- 1) 本論は平成17年度に提出した修士論文、「フランツ・カフカ『万里の長城の建設に際して』における〈未完成性〉の分析」の内容の一部を加筆修正したものである。
- 2) Franz Kafka, *Schriften Tagebücher Briefe Kritische Ausgabe. Drucke zu Lebzeiten*, hrsg. v. Wolf Kittler, Hans-Gerd Koch und Gerhard Neumann, Frankfurt a.M. 1994, S. 280–282.
- 3) Vgl. Wolf Kittler, *Der Turmbau zu Babel und das Schweigen der Sirenen*, Erlangen 1985, S. 50.
- 4) Kafka, a.a.O., S. 280.

- 5) Ebd., S. 47.
- 6) Vgl. *Duden. Das große Wörterbuch der deutschen Sprache*, hrsg. v. Wissenschaftlichen Rat der Dudenredaktion, Mannheim 1999.
- 7) Erich Auerbach, »Figura«, in: E. A., *Gesammelte Aufsätze zur Romantischen Philologie*, München 1967, S. 55.
- 8) Ebd.
- 9) 翻訳のされ方は、以下の通り：「いまやスケーマは『外的な形態』としてギリシアの学術用語の中で広く普及していたので——文法的、弁論学的、論理学的、数学的、天文学的に——、このラテン語では至るところに *figura* が現われた。そして、根源的な彫塑の意味と並んで、またそれ以前に感覚的な現象および、文法的、修辞学的、論理学的、数学的、そう、後には音楽的、舞踏譜的な形式のはるかに一般的な概念が現われた。」(Ebd., S. 57.)
- 10) Ebd.
- 11) Ebd., S. 58.
- 12) ルクレティウスの形象論について：「『模像』の意味の特別な変形はルクレティウスの形象論に見出される。それは皮のように、事物から剥がれ、空気の中を浮遊するもので、デモクリトスの的なあの『イメージ膜』(ディールス) 説、物質的に理解された *Eidola* にも見出される。それを彼は [...] *figuras* とも呼んでいる。」(Ebd.)
- 13) Vgl. Gabriele Brandstetter/ Sibylle Peters, »Einleitung«, in: *de figura*, hrsg. v. G. B./S. P, Bonn 2002, 7–30, S. 9ff.
- 14) Vgl. Auerbach, a.a.O., S. 65.
- 15) Ebd., S. 66.
- 16) Vgl. Ebd., S. 67.
- 17) Vgl. Ebd., S. 77.
- 18) Vgl. Norbert Elias, *Was ist Soziologie?*, Weinheim; München 51986.
- 19) Vgl. Ebd., S. 138f.
- 20) Vgl. Ebd., S. 134.
- 21) J. L. オースティン (坂本百大訳) 『言語と行為』大修館書店、1978年、186頁参照。
- 22) 同書、37頁以下参照。
- 23) ジャック・デリダ (高橋哲哉／増田一夫／宮崎裕助訳) 「署名 出来事 コンテクスト」『有限責任会社』法政大学出版局、2002年、9–56頁、当該22頁参照。
- 24) 同書、24頁参照。
- 25) 同書、33頁参照。

- 26) 同書、26頁参照。
- 27) 同書、26頁以下参照。
- 28) 同書、43頁参照。
- 29) オースティン、前掲書、26頁参照。
- 30) 同書、33頁参照。
- 31) ジュディス・バトラー (竹村和子訳) 『触発する言葉』岩波書店、2004年、81頁参照。
- 32) 同書、51頁参照。
- 33) ジュディス・バトラー (竹村和子訳) 『ジェンダー・トラブル』青土社、1999年、254頁以下参照。
- 34) Vgl. Judith Butler, *Körper von Gewicht*, Frankfurt a.M. 1997, S. 152.
- 35) Vgl. Bettine Menke, »Zitation/ performativ«, in: *Rhetorik. Figuration und Performanz*, hrsg. v. Jürgen Fohrmann, Stuttgart/ Weimar 2004, S. 583–602, hier S. 590.
- 36) Butler, *Körper von Gewicht*, S. 365. (Anm. 115).
- 37) Ebd., S. 156.
- 38) バトラー 『触発する言葉』 209頁参照。
- 39) Butler, *Körper von Gewicht*, S. 155.
- 40) 原因と結果を転倒する換喩について、ニーチェは次のように述べている：「時間的な逆転、そのために原因が後で意識のなかで結果として現われる。 […] われわれが意識する外界の断片は、外界からわれわれに働きかけてくる結果の後から生まれたものであり、後付けでその『原因』として投射されるのである。」(Friedrich Nietzsche, *Werke in drei Bänden*, hrsg. v. Karl Schlechta, München 1956, Bd. 3, S. 804f.)
- 41) バトラー 『触発する言葉』 78頁参照。
- 42) 同書、52頁。
- 43) Heinrich Lausberg, *Handbuch der literarischen Rhetorik*, München 1960, S. 411.
- 44) Vgl. Bettine Menke, *Prosopopoiia, Stimme und Text bei Brentano, Hoffmann, Kleist und Kafka*, München 2000, S. 137f.
- 45) Vgl. Ebd., S. 11.
- 46) Vgl. Ebd., S. 149.
- 47) ポール・ド・マン (山形和美／岩坪友子訳) 「汚損されたシェリー」『ロマン主義のレトリック』法政大学出版局、1998年、119–156頁参照。
- 48) Vgl. Menke, *Prosopopoiia*, S. 143f.
- 49) バトラー 『触発する言葉』 46頁以下参照。
- 50) Vgl. Menke, »Zitation/ performativ«, S. 593.
- 51) Vgl. Anselm Haverkamp, »Fest/ Schrift«, in: Walter Haug/ Rainer Warning



(Hrsg.), *Das Fest*, München 1989, S. 276–298, hier S. 288.

- 52) ド・マン、前掲書、149頁以下参照。
- 53) Vgl. Menke, *Prosopopoiia*, S. 137.
- 54) ミシェル・フーコー (清水徹/豊崎光一訳) 『作者とは何か?』哲学書房、1990年、11頁参照。
- 55) 同書、20頁参照。
- 56) 同書、23頁参照。
- 57) 同書、35頁。
- 58) ロラン・バルト (沢崎浩平訳) 『テキストの快樂』みすず書房、1978年、50頁。

Figuration des Lesens und Schreibens  
—(De-)Konstruktion der Figur in der Performativität—

KIMURA, Yuichi

„Wer spricht?“ Diese Frage setzt voraus, dass es das „Subjekt“ der Tat hinter der Stimme gibt. J. L. Austin, der die sogenannte Sprechakttheorie entwickelt hat, weist darauf hin, dass Performativität einerseits von der reinen Intention des Sprechers, des Subjekts der Aussage, abhängt. Wenn diese Performativität auf verschiedene Weisen kontaminiert wird, z.B. von Spiel, Lüge, Missbrauch usw., „scheitert“ sie daran, eine adäquate Wirkung zu erzielen: Sie soll ganz und gar vom Subjekt beherrscht werden. Andererseits hält Austin auch die Konvention, die eine das Subjekt bewahrende und steuernde Macht hat, für eine Bedingung, damit die Performativität ihre Leistung erbringen kann: D.h. ohne Macht, keine Wirkung. Könnte man hier nicht fragen, was der Ursprung der Performativität ist: Subjekt oder Macht?

Das Problem ist schon darin zu erkennen, wie und von wem ausgehend die Performativität eine Wirkung ausüben kann; mit anderen Worten, es geht wieder um die Frage: „Wer spricht?“. In der vorliegenden Arbeit handelt es sich um diese Frage. Aber diese Arbeit versucht nicht, unmittelbar auf sie zu antworten, sondern über die Struktur, die diese Frage überhaupt ermöglicht, nachzudenken.

Figuration ist eine Struktur, die in der Performativität wirkt und sie ermöglicht. Sie erzeugt die Figur, aber zerstört sie auch zugleich. Hier ist die Erzeugung der Figur die notwendige Voraussetzung für ihre Zerstörung—und umgekehrt, ihre Zerstörung die ihrer (Wieder-)Erzeugung.

Was ist aber die Figur? Diese Frage ist nicht leicht (oder gar nicht) zu beantworten. Nach Erich Auerbach drückt die Figur in der besonderen historischen Ausprägung und Veränderung ihres Wortsinns etwas Lebendig-Bewegtes, Unvollendetes und Spielendes aus. In der historischen Veränderung ihrer Bedeutung spielt sie immer wieder zwischen Urbild und Abbild. Das lateinische Wort „figura“ gewinnt als Übersetzung des griechischen Wortes

„Schema“ den Sinn von etwas mit seinem ursprünglichen Sinne Ähnliches, und verschiebt allmählich seine eigene Kontur in solcher Wiederholung der sinnlichen Transformation und Dissemination. Die Figur verbindet dabei Urbild und Abbild miteinander und spielt gewissermaßen als ein „Zwischen“, das sich aus der Differenz in der jeweiligen Bewegung ergibt und als Leerstelle in der Verschiebung fungiert, d.h. die „Figur“ selbst figuriert sich immer wieder neu und anders je nachdem, welcher Sinn ihr verliehen wird. Die Figur beinhaltet damit immer schon die Doppelgestalt von Urbild und Abbild, nämlich sowohl die Ähnlichkeit in der Form als auch die Differenz, die Simulation und die Dissimulation. Sie hat keine feste Kontur, die sie ontologisch bestimmen und eindeutig festlegen würde. Sie bewegt sich immer wieder wie etwas Lebendiges und verändert sich je nach dem Kontext, in den sie eingesetzt wird.

In der Performativität, deren Leistung notwendigerweise vom Kontext abhängig ist, werden Figuren hergestellt, die als Ursprung der Performativität Verantwortlichkeit tragen müssen. Performativität, die nichts als sprachliche Tätigkeit ist, leistet diese Produktion in der sprachlichen Dimension, vor allem in der rhetorischen, figurativen. Rhetorisch heißt dies „*Prosopopoiia*“, durch die den Toten und Abwesenden in deren fiktiver Rede eine Stimme, ein sprechendes Gesicht, eine Figur und eine Maske (*prosopon poiein*), durch die sie gesprochen haben sollen, verliehen werden, weil der Ursprung der Performativität, der erst nach ihrer Auslösung a posteriori erzeugt wird, nichts als eine stimmlose Leerstelle ist. Aber diese Figuren sind instabil, weil die Figuration des sprechenden Gesichts wiederholend in der Auslösung der Performativität vollgezogen wird. *Prosopopoiia* verlangt deswegen paradoxerweise, das sprechende Gesicht als Maske zu geben und gleichzeitig abzunehmen, zu konstruieren und zugleich zu dekonstruieren, zu figurieren und auch zu defigurieren.

*Prosopopoiia* besteht deswegen in der Frage: „Wer spricht als der Ursprung in dieser Performativität?“, denn sie verlangt die Herstellung der Figur, um sie in ihrem Ursprung der Performativität als Leerstelle einzusetzen. In der figurativen Bewegung wird die Figur jeweils in Szene gesetzt. Sie ist im Umstand oder Kontext um den Text herum die Wirkung der prosopographischen

(De-)Figuration. Von daher liegt es nahe, dass Performativität das Lesen und Schreiben der Figur voraussetzt, die die mangelnde Instanz als Ursprung von Subjekt oder Macht ersetzt. Aus dem Lesen und Schreiben ergibt sich immer wieder die Frage: „Wer spricht?“, und sie motiviert und ermöglicht die sprachlichen Tätigkeiten in der rhetorischen Dimension.

Hinter der Performativität steht nicht einfach das Subjekt oder die Macht. Vielmehr ist sie eine Wirkung des performativen Lesens und Schreibens mit der prosopographischen Frage: „Wer spricht?“. Jede Tätigkeit, sei sie sprachlich oder nicht, kommt als Performativität durch das Lesen und Schreiben zur Geltung, weil wir uns nicht vom sprachlichen System befreien können, denn wir können und müssen in der und durch die Sprache leben. Es gibt damit nichts außerhalb der Sprache. Lesen und Schreiben figuriert den Rahmen, der die Möglichkeit der Performativität in unserer Gesellschaft durch die figurative Wirkung abgrenzt.

(人文科学研究科ドイツ文学専攻 博士後期課程 1年)